藝と扇と

一

軍扇と丁度對蹠的な位置にあるものが蹴鞠の扇である。

それもその筈である。蹴鞠の道は、遠く支那古代の傳說的な帝王、黃帝がその仇敵蚩尤の首を足蹴にしたといふ傳說に源をもとめてゐる。卽ち、平時既にその敵の首級を足にかけて、敵の降服を祈念し、時にそなへる爲に練武する技である。蹴鞠は平時のひそかなるたゝかひといふべきである。鞠の扇が明らかにそれをつげてゐる。

この扇は、先づ第一にその長さが一尺二寸もあることと、金地に銀の月輪、それに老松を配した繪樣を表とし、裏は銀無地に金の日輪一つを表はしてゐる事が注意される。もし老松一本をとりのぞけば、これは正しく軍扇の扇面繪樣と表裏を異にしてゐるに過ぎない。老松を描いてゐる事も、要は表裏を示す爲

と鞠の扇の目じるしとして懸(カカリ)の松を描いたに過ぎぬ。その骨の彫透しも六骨透しの名稱を負うてゐるのであり、實は廷尉の扇の六骨透しの彫透しである事を告げてゐる。この扇は飛鳥井流の鞠扇の、その中でも最も初めに「十骨鞠扇を許す」といはれてはじめて初心者の持つ扇である。しかし、それは、かくも嚴格に、初心の中に、武道の裏である事を印象づける扇である。

この扇の漆黑の親骨の上には、その持ち人の家の紋を付する事を習としてゐる。これは闘鞠の時の爲だといふのである。

扇闘蹴鞠の時は、座にゐる鞠足の各〻の扇を、闘役が廣蓋の上に集め來たつて、鞠庭に至りこの扇を廣蓋の上で混じ終つて、一本づゝ次第に鞠座に配り歩く、やがて餘つた扇を持人に返し終ると、扇の返らないものは、順次に鞠庭に入つて自らの扇を搜し求めてその位置に付く。かくて、蹴り初める卽興の蹴鞠それが扇闘と呼ばれる一つの鞠の遊である。

鞠の庭に置かれた扇には、色様々の扇がある。紅、黄、緑などの地紙の上に懸の樹を描いた扇面、そして蘇芳染の十骨や、黒や白の十骨。師範の持つ小形のや、老色の用の桐骨老松の圖の鞠扇など。その要にも、鞠を蹴上げる時でさへぬけ落ちない爲の心くばりといはれる鞠扇特有の榧の實そのまゝの椎要(シヒガナメ)それが目立つて見える扇など。

しかし、金地月輪の十骨扇と、宿老の桐骨鞠扇とのほかの扇どもは、要するにたゞ鞠足の高下を區別する爲のいとなみにすぎない。老色の上足の桐骨の鞠扇は、老者の格式たゞしい檜扇の姿を傳へる扇なのであらう。鎌倉の時代では帝の鞠場に用ひ給うた扇を檜扇であつたと「增鏡」はのべてゐる。さうした檜扇の古い傳統を、材は桐とかはりながらもこの桐骨の鞠扇は寫し傳へるものに外ならない。

飛鳥井流の鞠扇でもまだ室町の時代には、八骨扇、その繪は家の紋、といふ事

飛鳥井流十骨蹴鞠扇

形体利

もあつたのであるが、やがて飛鳥井雅敎の十骨扇許容の許狀によつて室町末期に、既に今日の十骨鞠扇の完成がうかがはれる。

鞠の家には鎌倉時代以後は飛鳥井の外に、難波があつた。御子左があつた。それに加茂地下鞠があつた。難波流の扇は向丁字彫である。牡丹に蝶の飛び交ふ圖樣は初心のものであらうか。早くおとろへたこの流は、骨の姿を傳へる外には二三の事以外には知るよしもない。御子左は鞠を蹴らない鞠の家である。扇の定められる筈もない。地下鞠のは長大な一尺數寸に及ぶ扇である。しかし飛鳥井一流の外は、今はすべて鞠の傳へそれさへも失ひはてゝ了つてゐる。

二

蹴鞠は、支那傳來でありながら、王朝の潤美な世態に同化せられ、國風の遊技として發展したものであつた。そして、公家の社會から武家へと滲潤した遊

技であつた。

香の道も亦之と似通つてゐる。――香のかをりを賞する事は又支那傳來であるが、王朝の遊技となり鎌倉の時代をへて室町時代になると、一つの傳統が發生する。香道卽ち之である。しかし、この道も、彼の鞠の道の樣に、尙一層それよりもはなはだしく衰微して、室町より江戸の初期の頃の曾ての隆盛を思ひ見るかげもなく消え失せ、傳統のすべては廢絕し果てようとしてゐる。

それでも、幸に、香の道に用ひられた扇が僅かに志野の一流のみであるが傳はつてゐる。香と扇――これは一見相反するものゝ結合であるかに思へる。靜かな空氣の動かない中におのづとたゞよふかをりと、空氣の動搖に生命を托する扇と、これは實に奇妙な結合である。しかし、香道の扇は、空氣を搖り動かす扇ではない。室町の時代に既に確立してゐた禮法の中に取り入れられた扇、その扇が香道に於ても取り持たれる扇なのである。そして、煽ぐ扇ではなく

て、禮儀以外に他に使用の目的を持つてゐた。それは記、錄、扇、の名にふさはしく十炷香や源氏香を聞き別ける際に記錄せられる料紙としてゞあつた。こゝに古い藤原の時代、料紙として撰ばれた扇の心がよみがへつてゐる。常にこの樣に新たなるものも、古きものに、古きものも新たなるものに、連ながり蘇る姿は、殊に日本の歷史の中に見出でる處である。大いなる歷史の姿は扇の樣なさゝやかなもの、どんなさゝやかなものゝ中にもひそんでゐるのだ。――古き王朝の心にもかよふ志野の香の扇は、三條西實隆に師事して、初めて香の精神の考へられた、そして最も完成した香道を打立てた志野宗信その人が作り出した香の扇ではなかつたかもしれない。しかし、細い煮黑（ニグロ）の扇の親骨の上に彫られた鎌足彫は、見る人に何らかの公家の扇とのつながりを思はせずにはおかないし、又春の花、秋の紅葉をめづる古來の上流の自然觀がこの香の扇に寫し出されてゐるのを思へば、益々貴族との關聯を考へしめる。けれども、この扇に表

現せられた櫻花楓葉は、決して絢爛とした濃彩の例へば夏扇にでも描かれるであらうやうな繪畫ではない。かへつて、表は白、裏は黄色の地紙の上に一面には四五の花、一面には數葉の楓の落葉が銀の線描で示されてゐるにすぎない。萬山花の霞にとざされた吉野の様と、錦繡の立田のあたりを紙の色とこの僅かな繪で示さうとしたその心のさまは、もはや單なる裝飾でもなければ美麗でもない。それは反つて、華麗を通りこした次の段階に立入つた複雜にして單純なる精神である。東洋のみが知り得る處の美意識に他ならぬ。かうした文様がとり入れられたこの扇の發生は、恰もその精神に於て、室町時代特には東山時代のもつた精神に通ふといへる。よし、それが宗信の好み出でた扇でなくとも香道の性格はかうした扇の上にさへ慘み出でゝ、日本人獨特の境地を現はしてゐる。「侘び」の心組がをのづとこの扇の中にながめられるであらう。

三

しかし、何といつても「侘」の心は、茶道に於て深く求められ、その世界觀として認められた處であつた。――志野の香の扇がもつてゐた「侘び」のにほひは、實は、室町の時代的な一面であるとともに個人的には志野宗信が珠光や肖柏などとともに義政の頃に於ける茶人として面目を有してゐたためであつた。從つて、志野の扇が含む「侘び」の心は、茶の扇に一層單的に滲み出でねばならない。

茶道の成立と發達の歴史からいへば、當然義政の時代を以て最初の主要な中核と考へねばならないが、しかも、この頃の茶の扇といはれるものは殆んど全く遺つてはゐない。灰屋紹益が聚集し、その烏有に歸した後ずつと後世元祿年間に集錄されたと傳へられる「集古扇圖卷」に僅かに義政の茶の好扇といふもの

を載せてはゐるが、勿論その傳來の點から見ても充分な信を置くわけにはゆかない。この扇面はたとひ義政の時代のものとしても、その圖樣が金の雲形紅地の上に飛鷺といふあきらかに末廣の扇面である事を示してゐるので、義政がたゞ茶莚にのみたづさへた扇卽ち茶の扇としてあつたと見る事はできぬ。勿論義政とても、禮法の確立しつゝある時代であるので扇を茶莚に、ひとり茶莚にかぎらず日常の起居にも絶えずたづさへたことであらう。そして茶の扇となる以前の日常の扇——たとへば末廣であつたり、或は夏扇等の鎭折であつた事であらう。日頃公私萬事に用ひられた扇が行はれたと見るべきである。

その後室町の季世戰國の時代には、一つには心の安住の場所として、又一つには政略の上から茶の蔕は間なく行はれたものであつた。そして、禮法がつねに扇を携へるべき事をのべてゐるので、茶のいとなみにも扇のたづさへられた事はいふまでもない。しかし、この時代の茶に於ける扇の携行は又別な理由からでもあつた。卽ち、それは、客人が闕口(ニジリグチ)に扇を挾んで縱殺をまぬがれる爲であるといふのである。万人總て敵と見てあやまらない戰國の世を思ふ時、この樣な殺伐な行のあつた事は決して不思議でもないし、又それに對する防備も、風流の中に存してゐたのである。けれども、茶の扇として後世の樣に獨立したものはなかつた事であらう。從つて、やがて茶の心を持つた茶の扇の出現は、次の時代、利休居士による、「佗び茶」の大成と共に初まるのであつた。

その利休居士の茶の扇は、利休形と呼ばれる。恰も、多くの茶の道具に同じ樣な呼稱のある樣に、そして又その多くの利休形が多くの道具の骨子をなす樣に、この利休形の扇も亦其後茶の扇の骨子をなしたものである。それは一つの定形であり、好(コノミ)とよばれるものよりも、もつと本源的なものなのである。好以上のうごかし得ないものゝ謂で形とよばれるのであらう。

その扇の長さは一尺、十骨の細骨、端正な扇である。地紙の兩面は全面銀砂

子の一色である。利休が銀砂子を用ひた事は、彼の義政が金閣に對して銀閣の營造の中に枯淡を觀じた樣に、この桃山の頃盛んに行はれた金無地の華麗な扇に對して茶のほろ苦い味を示したものである。さびたこの銀の色は、その上に描かれた長谷川等伯の手と傳へられる水墨の樓閣山水と胡粉の大樣な白菊文樣の表裏相映ずる樣とともに利休の茶の心を示してゐる。黑と白の淡い一色の中に萬有の實體を觀じ去らうとした事は、深く悟入した境地でなければならぬ。

茶の道には大悟の心構がひめられてゐた。——それは豪壯ではあるが、豐麗ではなかつた。利休がこの扇を以て——長さが丁度一尺、地紙の折りたゝんだ幅が一寸、その他細かな寸法がこの扇一本で測り得られるので——尺度(モノサシ)に代へた心もちは、細やかな心づかひのある事を示してゐる。それは細微ではあるが纖美ではなかつた。その後に好出(コノミ)でられた多くの茶の扇は、いつもかうした心情を有してゐた。しかも、又、茶の道にそれ〴〵の流統、一人々々の茶人のある樣に、共に同じ茶の扇ではありながら、流統の相違、個人の心意氣のまゝに樣々に好まれた扇であつた。そして、その一つ〳〵がそれを好んだ茶人の全人格の露呈に他ならなかつた。

利休の手馴れたこの利休形の扇は、その後、不審菴卽ち表千家では吸江齋によつてしたはれてゐる。よく似た白菊文樣の白菊扇の案出となり今日菴裏千家では玄々齋の陶淵明の故事によつて名付けた東籬扇として、又官休菴千家では直齋の白菊扇として再現してゐる。近くは卽中齋の雲龍扇、愈好齋の吉菊扇にその一部が寫されてゐる。利休形をしたふ心は、やがてこれらの宗匠の心の豪毅を示してゐる。

細の十骨扇の傳統的なるに對して、如心齋天然は全くおどろくべき異つた扇を好出でてゐる。それは公家の蝙蝠扇に出自をもとめた如心齋好であるが、その親骨に煤竹を用ひた事が大きい相違であり、茶の「侘び」を示してゐる。力の

ある強い姿を通して見る人をして天然の人格に接する思ひを起させずにはやまない。

茶の道は、たゞ「侘び」ひとつのみではなかつた。靜かな奇拔さといふものもひそんでゐた。後の吸江齋の丹頂扇を見てもその一面を知る事が出來る。白地の上を僅かに紅に彩つて、親骨の黑と中骨の黃色とは一羽の丹頂の鶴を脫化したものであるが、素晴らしく奇勁な風情である。利休を慕つた吸江齋に、又この樣な奇拔さのあつた事をみのがしてはならない。

或は「侘び」に徹し、或は奇勁に動きながら、多くの宗匠の好扇が、茶扇の目立つた一つの特色である彼の扇銘を、恰も他の多くの茶道具の場合の樣に一つ〳〵の扇に銘が名付けられて續々と好み出されてゐる。卽中齋好祥雲扇、淡々齋好渦扇、愈好齋好吉祥扇、この樣に名付けられた好扇は旣にその數は百種以上に達する事である。しかし、そのすべては唯一つ「侘び」の心を失ふものではなかつた。

千家の一流のもつ「侘び茶」の心に對して、燕菴の流には、その傳統の古い樣に、「大名茶」の趣を見出し得る。それはたゞにその好扇の橋柳水車の圖によつて察し得るばかりではない。

桃山時代のもつた枯淡にして豪壯なるものと華麗にして優雅なるものとは、かうして流を別つて茶の上に傳へられたものであつた。

四

その華麗優美の面に生きるかに見えるものに、また能樂がある。

しかし、能樂にも、實は、なほ彼の茶に於ける「侘び」の心に通じるものをもつてゐたのである。古い申樂（サルガウ）の中より發達化生した能ではあつたが、室町時代といふ時代的な雰圍氣の中に完成したが爲であつた。けれども、能に於けるこ

の時代の心は、彼の松風の音に世を觀じる姿ではなく、「花の下に行きくれる」底の幽玄であり「たゞ美しく柔和なる體」を本體とする幽玄である。

能がその本質に於て演者自らの藝術であると共に觀衆の藝術であるといふ二面性をもつてゐる爲に、常にこの兩者を統一するものがなければならなかつた。そして、それをはたしたものが幽玄の心であつた。從つて、能の演技粉裝のすべてに亙つて、この二面性と、この幽玄の心がながれてゐる。しかも、能は、諸社に附屬した申樂の中、特に春日申樂の能より發展し、且つ春日若宮の御祭（オンマツリ）に際して影向（ヨウゴウ）の松の下で所謂松の下の能に神にさゝげる本來の姿を示すものであるので、ながく能の舞臺に於てさへもその鏡板に影向松の姿を寫して、そこに演ぜられる能のすべては神に捧げるが如くに森嚴である。

この意味で神扇は考へられる。その扇面の繪は松の下の能の場合に鳳凰をそれ〴〵表裏に描いた如くに鳳凰の桐花に圓舞する姿を寫してゐる。それは帝王の鳥であり、神扇と呼ばれるにふさはしい。

二番目ものゝ扇、日輪と老松。これを勝修羅扇と名付けるに對して、波濤と日輪の扇を負修羅扇と呼ぶ。特に、これに介藻を配したものは、彼の西海に沒した平家一門の公達への手向として公達扇（敦盛扇）の名さへ付けられてゐる。

總じて、修羅扇はいふまでもなく軍扇の事である。軍扇をとりもつて修羅物を演じた事が、この扇の初めであらう。やがて、能の衣裝の發展にともなひ、且つは能の藝術としての價値の高まるにつれ、軍扇は修羅扇と化して、或は老松に榮ゆる姿を托し、或は狂奔する海波にしづみ行く平家の運命をかなしむ心を產んだ。その濃やかなる心根は、さすがにあはれな平家の公達に一種の修羅扇を獻ずる迄に至つたのであらう。

たけ〴〵しい男性の軍（イクサ）の場面を描いた二番目能についで殆んどすべてが美女の戀物語を織りこんだ一群の能を三番目能とした事は、能作者の人間味であ

る。優にやさしいこの能は葛物とよばれ葛扇が仕手にたづさへられる。玄宗と貴妃の情史に取材した繪樣が扇面に撰ばれた事は、この能の美しさをあくまでも引立てんが爲である。驪山の春の園に共に詠めた花の色を相たゝかはせる花闘と濃艶の花を運ぶ花車、これが本三番目能の本型の扇の圖樣である。美女と花卉との對照は、この世の絢爛豐麗の極致でなければならぬ。

この葛扇から派生したものが天女扇である。あの「吉野夫人」や「竹生島」等のツレの天女がたづさへるこの天女扇は、脇能の中に見出すのであるが、實は天女の美を表現する爲の葛扇の變形に他ならぬ。そしてこの金地に絢爛たる櫻花の表出は、木花咲耶姫尊の御影であらねばならぬ。葛扇はこの樣にして、やがて變化を生じる扇である。

戀に醉ふ美しき人も、一度破れては狂女となり、齡かさねては世のならはしのそのまゝに老女の身と成り果てねばならぬ。かうして四番目能が產み出される。葛扇もやがてその花やぐ紅の妻の色をうちしづむ紺青の色と變へ、爛漫たる花卉は秋の清楚な野花と變じて先づ老の靜さをたゝへる。しかし、この扇はやはり葛扇と名付けられる。けれどそれは無紅葛扇なのであつた。「六浦」・「葛城」の如き、人の世界を絕えた幽界の婦人の秋の扇である。人界の老婦はやがて鬼籍に入らねばならぬ。彼女は鎖魂橋を表はした老女扇をたづさへねばならぬ。一切の若さを示す紅はしりぞけられて、橋の金、飛鷺の白さ、水の紺青、この鋭い對立が見る人の眼に燒付く扇である。

同じ若き女人の移り變つた姿であつても、老女とは異り、若さの故に物狂ひする人の扇は、妻に紅を染出して籬に菊や菊の丸などの文樣を畫き、その源が葛扇に出てゐる事を思はせるのであるが、老女のなほ狂ふ姿は特に狂女扇の本態として定められてゐる。この扇に紅をのぞいた紺青に、咲き亂れた鐵線蓮と小山にしげる松枝、この二つの場面が同一の畫面に表現されてゐる事は、花の

咲き狂ふ姿に變化を示し松のみどりに恆常を示してこの二つの心理の錯亂する狂人の心情を描き出したのでもあらうか。鐵線蓮の又の名が菊唐草といはれる事を思ふ時、若き狂女の手にする扇の菊の圖とことばの緣(エニシ)が通じる事は、果して偶然であらうか。故意であらうか。

花を畫材とした能扇はこれらに盡きるのではない。菊慈童に依つた菊に流れの童扇(ワラワ)や、咲き誇る牡丹一輪を朱色あざやかな扇面の上に描いたあの鬼扇、これらは同じく葛扇から派生したのであらう。妻紅ではあるけれど秋草に鳴く蟲一つを描いた融扇も、實は秋草の老女扇引いてはやはり葛扇に緣を持たねばならぬ。亂扇にしても、若き紅妻の狂女扇の分派である。これらの數多の派生的な能扇の出現は、僅かに數番時には單に一番の能の曲の爲にさへ扇が定められる結果となつた。あの善知鳥二羽に善知鳥一番の扇を定め、やぶれ芭蕉と山路を思はす老松と葛を描いて山伏の行路の姿をしのび、或は白雲に月を描いた雲月扇に行雲流水の僧の苦行を暗示するなど、卽ち、かうした能扇の分派の結果に過ぎぬ。——尤も、仕手方五流それ〴〵に相異つた能の扇、同じ圖樣でも用ひる曲目を異にする場合があつたりするけれども、惣じて、かうした出來事は能樂が完成し全盛を來して以來の事でなければ起り得ぬ事にちがひない。

初番目以下二・三・四番目それ〴〵の仕手の扇は、この樣に濃彩豐かであり艶麗である。そして世阿彌の幽玄は、この中にある。しかし、能扇のすべてはこんなに艶麗なものばかりではない。尉扇、男扇に見られる墨繪の竹林七賢や香魚の畫の如き枯淡なものも亦一方に存する。能扇の枯淡さは全くこれら男性の扇に表現せられたのである。そして、多くはそれらがワキの手に持たれてゐる事は、能樂に於て、華麗と枯淡との對照を思ふ上に興味深い事ではなからうか。

——これらの能の扇の圖樣を見る人が、もし一度彼の南禪寺所藏の扇面貼交屏風を思出すならば、彼此の間に圖樣の相似の存する事に驚くであらう。たとひ

全く同一でなくとも、似通つた風格を有してゐる事は、通じての能扇に見られる處である。それには能樂が丁度室町の時代に創成され幕府の庇護の下に發達したといふ事が大きな力をもつてゐなければならない。能扇は、室町的なものがその主潮をなしてゐる。それに或は桃山、或は江戸の感覺が少しづつ積みかさねられて出來上つたものであつた。

これらの能扇は、總て猫間彫のある黑骨であるとか白骨――實は黃ばんだ梅掛（ウメカケ）といふ染方による黃骨であるが――とかの扇骨に張られた末廣形、能扇では中啓と呼んでゐる末廣形である。これは、能樂が古く平安時代の末に扇を手にして舞つた白拍子の流をも掬みいれた爲によるのだといふよりは、寧ろ足利將軍の愛顧を早くから受ける處となり、この時代に、時には公家にさへも接近し、殊へ觀阿彌・世阿彌の時代に既にこれらの高貴の人々よりたえず扇を拜領した事があつたりして自づと末廣形が用ひられる樣になつた爲であらう。また、

中啓の樣な目立つた扇こそ觀衆の側に於ける見られる能として舞臺的な效果がある爲でもあらう。かうした事が末廣を能樂に引入れた原因にちがひない。

けれども、能樂の扇は中啓一つに盡きるものではない。これとならんで鎮折（シヅメオリ）の扇も亦行はれてゐる。それは「望月」の扇や「鉢木」の近衛引の扇は例外として、主に能樂の中でも謠曲の謠ひ手によつて用ひられたものではあるが、能樂の四流、江戸の時代に入れば觀世・金春・寶生・金剛の外に喜多の一流が派生して五流となつたその各々の仕手（シテ）方に區別立つた扇が行はれた。古くは眞・行・草の三體を有して、その眞の體のものには各流總じて骨に透彫りをもつてゐた。今でも觀世流だけはそれを殘してゐる。他の流は、或は行或は草の體の扇のみが今日に傳へられて來たに過ぎない。中でも、金春流のものは今もなほ戰國の頃世に行はれた通常の扇骨の面影をとどめて居り、金剛の流はその頃の骨の製作上の特徵を極度に誇張して今見る樣な形にまでなつて來た。しかし、古い傳統を

持たない梅若流――最近觀世流から分れたこの流は、松葉と梅花との特別な新しい透彫りをつけてゐるが骨全體の姿は觀世の骨そのまゝである。

これらの鎮折りの扇の扇地紙の文様は、中啓程には華麗ではないが總て各流の紋所を主要な圖の要素としてゐる。觀世の卷水や千鳥、金春の五曜、寶生の五ッ雲や氷碎き、金剛の九曜、今は金剛雲、喜多の三ッ雲これらが卽ち定められた文様である。そして、この圖様こそ各流相互の系圖的な連繫を明示してさへゐるではないか。――紋所を置く事は、思出せば丁度室町の頃公家の檜扇に强く主張せられた事がある。能のこれらの扇も亦この頃に起り初めたものかもしれない。

これらの仕手方の扇の定められたのに對して、脇方や狂言方等の扇もことごとく定められてゐる。卽ち福王の流には獅子丸、高岡流は總薄(スヽキ)の圖、しかし、この高岡流は今はもうとつくに癈絶して知る人とてもなくなつてしまつた。狂言方でも鷺流は全く無くなつたし、和泉流さへ絶滅しかけてゐる。たゞ大藏流のみは今も盛んに行はれて、あの橋掛りの若松を表はしたにちがひない三本松の圖の扇を手にしてゐる。

囃子方でさへ、小鼓の幸流は攝家の鷹司政通が金の雲取の扇をこの流のものとして用ひた事が知られてゐるが、はたして以後この流の定めの扇となつた事であらうか。たゞ近年には、小鼓や大皮(大鼓)の扇の骨に鼓の形を彫りつけた事が一時行はれたがすぐ止んでしまつた。そして、多くは仕手方の扇を昔の様に今また用ひようとする傾向をもつてゐる。所詮、それは仕手方に附隨してゐる爲である。

能樂が五流分立して嚴としてその傳統を誇り、さゝやかなもちものに至る迄

各流その姿を變じて行はれそれが確固と傳へられて來た事には、實際は江戸時代の封建の社會といふものが大いに關與してゐるのである。そして、この能藝が盛大を極めた事は、つまりは將軍家の庇護の爲であつた。だから、能樂は、最初から觀衆をもたねばならなかつたけれど、しかも一般の大衆をつひに對象とする事が出來なかつた。それには教養と身分が要求せられた。大衆は、寧ろ、もつと卑近な技藝、もつと解りやすい演技を愛した。

五

それに答へるものとして、古くから白拍子の舞があり、念佛躍などの踊り物がさかえた。しかし、世が江戸となるに及んで遂に墮落した狂言師がこの踊り物に參じ物眞似を演じて古格を脱した新狂言、卽ち歌舞伎劇を作り出すにいたつた。——その最初に、出雲大社の巫女阿國が大社修覆の淨財募集の爲に行つ

面扇扇袋　樂能

面扇扇袋　樂能

奈良扇々面（二種）

奈良屏風（二扇）

た念佛躍の一類があつた。この阿國歌舞伎の隆盛が今日の歌舞伎のそも〳〵の初めである。

阿國は手に扇を持つて立ち振舞つたけれど、それは當時の世に行はれた庶民の扇以外のものではなかつた。以後、歌舞伎の世界に行はれた演出にともなふ扇は、彼の高座に大衆を引きよせた語り物師の張扇と類をひとしうして單に當座の世に行はれた民衆の扇に過ぎなかつた。それはそれ〳〵の技藝を代表する流派の扇として確立したものではなかつた。

所が、歌舞伎俳優の中から、婦女子の踊りの師匠が出るに及んで、形勢は一變した。

江戸の中期以後、京を中心として行はれた篠塚(シノヅカ)の踊の流には未だ確とした流派の扇はなかつたけれど、その後輩出した各流の踊には、既に確定した流派の扇が存した。

若柳流は柳とカタバミ、花柳流は櫻花と柳、藤間流は藤の花、西川流、井上流、茂山流、阪東流、吾妻流、それに近くは楳茂都流等の諸流はその名のよる處の紋所或はその變形や、流を表はす文字の便化を圖樣として、樣々に色どられて、至極華美な意裝を扇面の上に表はしてはゐるけれど、どこまでも流派を峻別してゐる。それはたがひに相競ふ心であり、その故にこそ流義の發達があつたのである。

しかし、女の踊りの扇は、所詮は、華美の一語につきる。たゞ井上流が能の觀世流よりながれ出た爲に、それのみはまだ能樂にみられる樣な沈潛した心根があるけれど、他の諸流儀はすべてたゞ華飾につきるのである。それは單に舞臺効果をのみねらつたに過ぎない。最早や、日本人の心の中にひそむ「幽かさ」、「深さ」を失つてゐる。

江戸時代の中末期以後に於ける民衆の心情には、かうした華飾なもののみがよろこばれたのであつた。享樂的な思潮がこの時代に行はれた事を思へば無理もない事である。

けれど、心ある人の中には、やはり日本人のもつ深い精しい心情がもとめられたに違ひないのである。——たゞそれが民衆藝術の上にまで影響するには至らなかつたといふに過ぎない。

六

日本の歴史の產んだこのやうな樣々な日本的な藝能に扇が結び付いた事は、決して偶然でもなく、故意でもない。それは公家や武家が扇をたづさへる樣に、日本にさかえた禮法がしからしめたものなのである。

もりあがる力

三二郎

けれども、扇が禮法の器となつたのは、最初からの事ではない。勿論最初は、利便の故や、珍らしい爲に人々の好愛する所となつたに過ぎなかつたであらう。まして、庶民の間で扇が行はれたのは、長くかうした理由からであつた。

彼の敎王護國寺の辛櫃の繪畫がもし正しく扇であるとすれば、扇は、世に產れ出でた初めから地位や身分を云々する事なく民衆の上にも行はれたものである。田夫野郎も市井の婦女も、夏の至るごとに紙張りの扇を手にした事であらう。そして平安朝から鎌倉・室町の時代へとその事はつゞいて行つた。そこには貴族社會に見られる樣な傳統はなく、世の移り行くまゝに、人の好尙の變ずるまゝに、作り出され行はれた流行に乘じた當世風な扇が存したに違ひない。

そして、その扇どもは、決して時代の上に力ある扇ではなかつた。たえず表面にあらはれ指導的であつた扇は、必ず、指導的な人々卽ち或は公家が或は武家が手にする扇であつた。

ところが、室町の時代に入れば事情が一變する。庶民の力が漸く世を導く樣になつたこの時代は、一時の流行や好尙によつて出來上つた民衆の扇が今や他の貴族の扇とともに世に主動的に行はれる樣になつた。そして、それがかへつて貴族の扇にも影響をあたへる事になつた。特に武家社會に行はれた殿中扇などは其影響の强く認められる扇であつた。

かうした民衆の社會に行はれた扇は、室町時代に於ける民衆の富の力を表現して華美を極めたものである。しかも、それがひとり文化の中心であつた京の土地ばかりでなく、地方の新興都市に於ても製產せられる樣になつたのである。彼の堺の如きはさうした民衆の扇を鬻ぐ扇屋が存してゐた事が判然と分る。他

の地方に於ても、例へば、西の山口や、北の金澤などには、扇屋が存したと思はれる。

室町の時代を過ぎて江戸時代に入るまで、この樣な庶民の扇は長く細骨であつた。室町以後禮法の確立にともなつて、今や世の上下を問ふ事なく人々の手にせねばならなかつた扇は、その初期にはこの樣な細骨の扇なのであつた。その故に、かへつて後の人々が末廣の名でこの細骨の扇を呼んで是非儀禮の爲に持たねばならぬと思ひこんだといふ笑ふべき錯覺が起つた。元來、末廣は上のひらいたあの公家の持物の末廣でなければならない。細骨のこの扇は決して末廣ではない。折りたゝんだ紙の幅が廣いから末廣だといふ樣な事はあやまりもはなはだしい。たゞ末廣の名が行く末を祝ふ心をこめてゐる爲に扇の總名として名乘られる樣になつた事は當然認めねばならないけれど。

庶民の扇にも、やがて江戸の中期以後には僅かながら平骨が行はれる樣になつた。特に婦人の扇に於てこれが認められる。彼の婚儀にたづさへられる黑塗の金銀の扇などは、この結果であらう。そして金銀の色に魔物をさけた目出度い儀禮の扇に、公家では殆んど使用される事の少ない黑色が撰び持たれた事は、公家風といふよりもかへつて武士風な行ひにちがひない。婚儀に附隨してなほ又緣を結ぶしるしの扇の贈答の今も行はれるのは、古く王朝の遺風には遠ひないが、昔は自分の票(シルシ)として自分の手にした扇を贈つたのであつたけれど、今は後々の使用を考へて男子には男扇、女には女扇を遣るなどとその風習も次第に利便を目的とする樣に實用的になつて來た。しかし、同じ黑い骨の扇でも、染上げたまゝの扇骨に薄墨色の地紙を張つたものはこの樣な慶祝の扇ではない。喪に服した人の扇として、まだ江戸の時代には上下に行はれてゐた。

こんな扇の種類は、江戸時代に作り出された扇の中でも普通のものである。この時代には世が泰平であり、上下を問はず人々が華美に流れた爲に、扇面の

繪畫にも扇の骨にも種々と奇を競ふ事となつた。

繪の花も匂ふ扇の麝香入

と、麝香扇を詠めるかと見れば、

布目にも風はもらさぬ扇哉

と布地張の扇を詠んでゐる俳諧師もある。

水打ちて油扇の猶暑し

と、いふは朝鮮渡來の桐油扇である。かうした朝鮮扇を模しては、名古屋の土地に骨數の多い扇がさかんに作り出される樣になつたし、月清い石山の土地では湖心に寫る月をめでゝ湖月扇を賣る店もあらはれてくる。遠く北陸の地にも加賀扇の製作が知られる樣になつた。江戸では扇地紙を肩に荷負つて町々を「扇々」とよびあるき、卽座に一本の扇に仕上げた「扇賣り」も現はれ出した。大佛の臺座の蓮瓣に毛彫りにされた九品の極樂のその姿、將又春日の宮曼荼羅

を思はせる奈良扇の現はれたのもこの頃である。京の土地にあつても、色目扇といふ扇が公家の夏扇に似通つた片張りの姿で色樣々の地紙をはられ、同じたぐひの綺麗扇には骨に二つの彫透しさへもなされて民衆の好奇心をそゝる。目近扇であるとか、畫師の友禪がその特有な賦彩をほどこした友禪扇や、扇骨に樣々の蒔繪のある扇など、或は京の土地にふさはしく八重ひとへの名をもつ桐地の扇、それに白梅の意裝に鶯の嘴を思はせる蕭洒な細骨を付けた白梅扇などは、それ〳〵、それを專賣する商賈を產むほどに一時の好尙に適したものであつた。總べてこのやうな樣々な民間の扇の出現は、江戸中期以後の事に屬する。

やがて、泰平の世にやうやく攘夷開國のさけばれる頃となると、今まで行はれ來たつた扇の繪畫——それは多く自然を愛し人情のこまやかさを寫した扇面畫にも、或は異國の船に放屁をくれてやる場面の樣な痛快な情景が寫し出され

て、それも木版刷となつて天下に行きわたる。かと思へば、海外の事情をこの一枚の扇面に盡くさうとした世界全圖や世界人物畫しの樣な啓蒙的な文樣も木版刷りとなつて扇に張られる。

この樣な混亂した中にやつと明治の維新がおとづれたのである。一切の舊習に一まづわかれをつげたのは公家や武士の事であり、民衆の生活は何となしに心もとない感じのまゝに經過した。しかし維新政治の確立とともに人心は安定しその生活をたのしむ事が出來た。——從來の民衆の扇は依然として民衆に愛せられた。否、寧ろ、有職故實の改癖の結果、上流社會にまでこの民衆の扇のみが行はれる樣になつた。

明治の御代の中頃に至つて、漸く從來數百年間も打つゞいた扇の地紙に變化を來した。純然たる和紙である糊地とか鳥ノ子であるとかは、最早稀に用ひられる貴い扇地紙と化し、その代りに多量製產による改良紙が地紙となつて出現した。これが今多く行はれてゐるロール地といふ地紙である。又、圓引の地紙もやがてあらはれ出すと、洋紙も同時に地紙に用ひられる事となつた。けれども、扇の形體はやはり室町以後の長らく用ひられた形を出る事はなかつた。

しかし、この時代、いな、江戸の最末期より海外貿易に從つた專業者の間には、歐洲風の扇が貿易扇の總名の下に製作せられ輸出せられてゐた。この狀態が依然として歐洲大戰の後までもつゞいて貿易好潮の時代を現出したのであつた。

一度、大戰後歐洲を侵した不況の風がふきはじめると、たちまちに貿易を目ざしたこの歐洲風の扇は日本の國內に滯貨となつて堆高くつまれた。やがて、これをどうして消化しつくさうかと迷つた揚句、遂に內地の需要にあてたのであつた。處が、この歐羅巴風の扇が、丁度この頃日本では歐風全盛の時代であ

つた爲に、人々の好みに合してたちまち長く數百年も打つゞいた日本個有の扇の形を一變してしまつた。それはあたかも大正年代の中期の頃である。

かうして、今日夏時至る處で見るあの骨數の多い、時には地紙が殆んど一二寸位に迄も短まつた扇が流布して了つた。古來からの扇はやつと禮式と結び付いて維持せられてゐるに過ぎぬ狀態である。

二

處が、昭和六年九月十八日を一大轉機として、日本の朝野は世界改造の聖業に乘り出したのであつた。打ち續く支那事變と大東亞戰爭の完遂は日本を全世界的なものに向上せしめた。日本的なものが再び日本人の血によみがへつた。聖戰をたゝかふ我兵士にそこばくの冷風を送る新たな樣式の軍扇が年毎に幾百萬と數しれず戰地の皇師に發送せられる。その扇面には時の陸軍大臣の揮毫になる不拔の聖戰の心構や悠遠なる聖戰の大理想を强力に呈示した大文字が旭日の赤色に映えて躍動し、古來の細骨の扇として調ぜられる。この新軍扇——かうよんでもよいであらうこの扇が北は滿蘇の國境から、南は赤道をはるかに越えた亞濠の接する地まで、西は印度洋の波さわぐ彼方へ迄、否全世界の隅々まで、まつろはぬ仇をことむける皇師とともに行き極み、やがて燦(サン)とした日本的な大平和が世界に建設せられるの日、世界のあらゆる處の人種人類から日本扇とあこがれる扇となる事であらう。

曾て、室町の時代に支那を經て世界に行きわたつた日本の扇は、今再び日本の聖業を乘せて、全世界に自ら行きわたらうとしてゐる。

三

思へば日本の扇の歷史は既に千年にも亘らうとする長い歷史である。その時

々の時代の思潮や好尚をのせて、この長い歴史の波を乗りきつて今もなほ遠く未來へ漕ぎわたつて行く。ほとんど何等の遺品をもつたへる事なく、ほとんど書き記るされる事もなく、秋たつとともに顧りみられないながらも、その技とその愛好を日本人の中につたへて連綿と續いて行くこの扇を思ふ時、そして日本人の感覺が日本人の手の指を通じて現はされたこの扇を思ふ時、淡いさみしさと深いよろこびを感じないわけにはゆかない。得も云へぬなつかしさをおさへる事は出來ない。曾て、永久四年に六條院の大進が

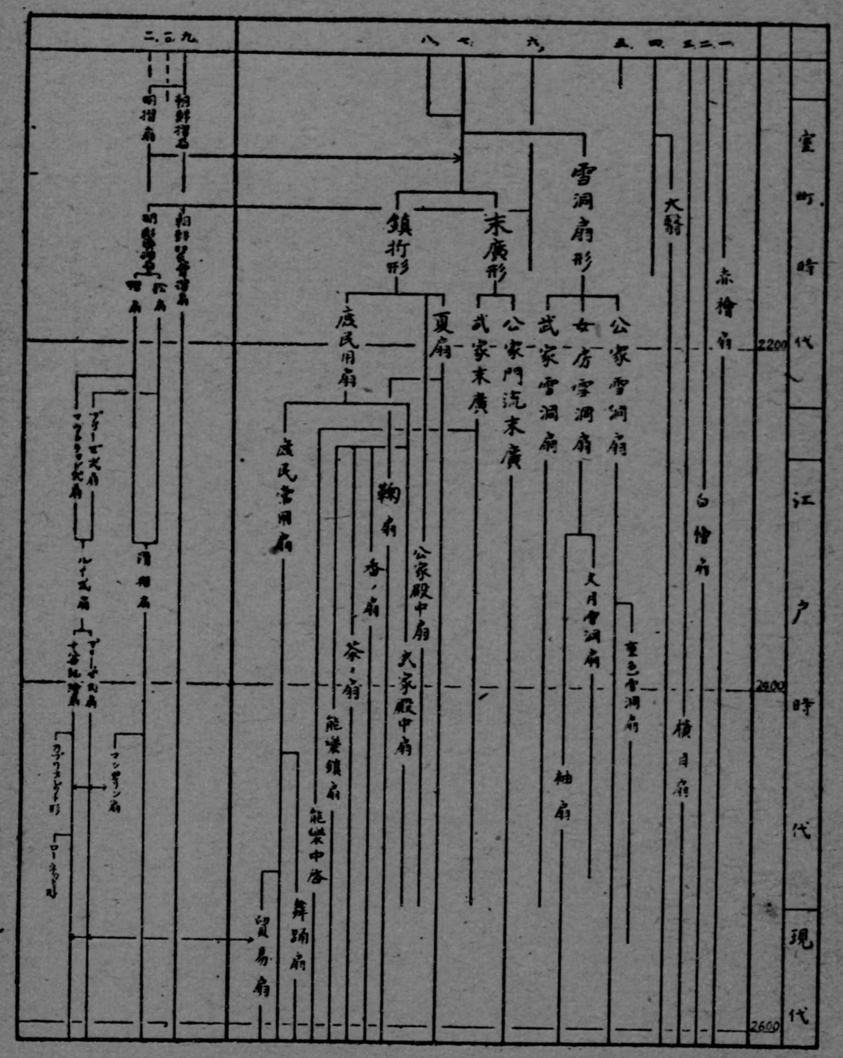
手なれけるぬしは知らねど紫の
扇の風のなつかしきかな

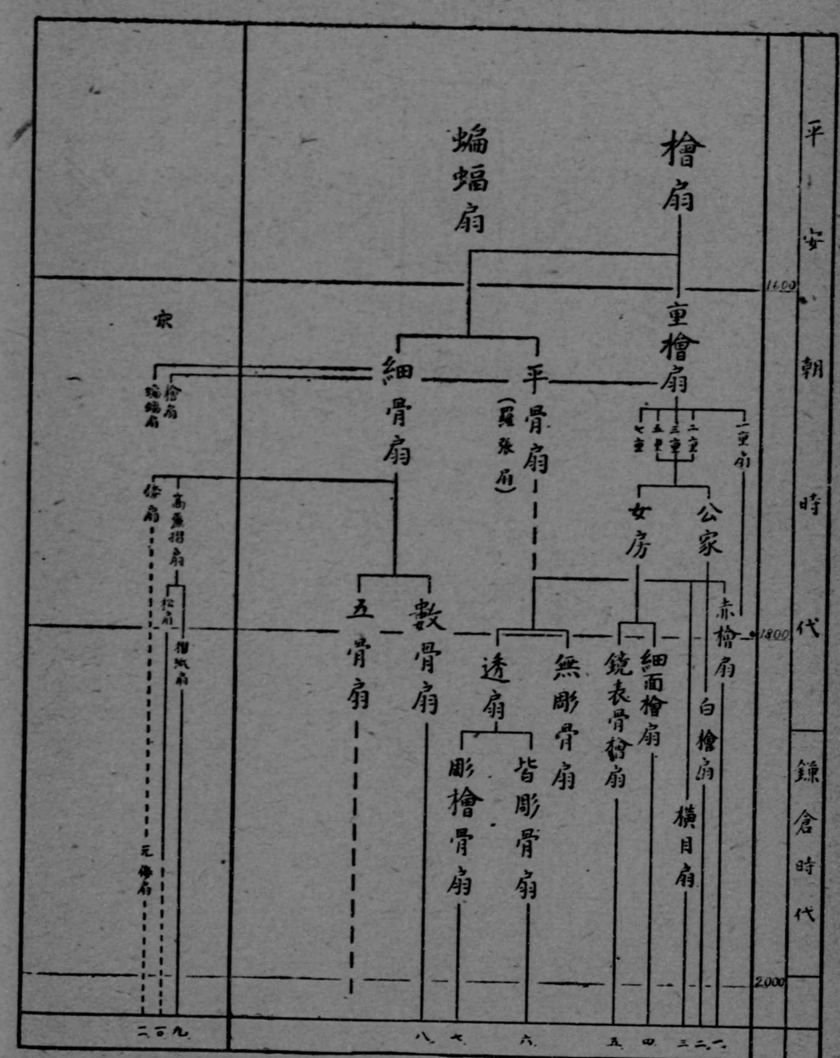
と詠じた心根があり〳〵と私の心によみがへる。

——終——

扇系圖と扇年代記

本表は古今千年に亘る我日本の扇を中心に、加へて東洋及び西洋の扇の主要なるものを以て一つの系圖に編成し、之を年表的に表示したものである。以て扇の歴史の全般を察しうると思ふ。


室町時代
江戸時代
現代
2200
2600
2609
雪洞扇形
末廣形
鎮折形
扇
夏扇
公家雪洞扇
武家雪洞扇
公家門流末廣
武家末廣
女房雪洞扇
庶民用扇
庶民常用扇
鞠扇
公家殿中扇
武家殿中扇
茶扇
能楽鎮扇
能楽中啓
舞踊扇
貿易扇
文月雪洞扇
軸扇
白檜扇
横目扇
赤檜扇
大骨
明檜扇
相鉄檜扇
明鉄檜扇
松扇
明扇
清州扇


平安朝
時代
鎌倉時代
1600
1800
2000
檜扇
蝙蝠扇
宗
檜扇
蝙蝠扇
重檜扇
一重扇
二重扇
三重扇
五重扇
七重扇
細骨扇
平骨扇
(羅紗扇)
徐扇
高麗摺扇
松扇
摺紙扇
元徐扇
五骨扇
數骨扇
女房
公家
赤檜扇
白檜扇
横目扇
透扇
無彫骨扇
鏡表骨檜扇
細面檜扇
彫檜骨扇
皆彫骨扇

索引

あ

青色扇……七九
青摺扇……七九
赤（色）扇……七九・一〇六・一六八・一八三
赤色綿面扇……八四
赤檜扇……七二・七八
柏扇……八五・二四六
淺黄白竹骨扇……一八〇
足利時代の扇……（室町時代の扇を見よ）
足利尊氏……一九八
足利義尚……二一〇
足利義政……一九〇・二一〇・二〇三
足利義滿……二四〇
足利義持……二一〇
愛鷹山經塚の扇……一二六・一三一
荒手繪女房檜扇……一三一・一三七・二三八・二四〇
飛鳥井神社の檜扇……二三八・二三九
飛鳥井雅敎……二九九
飛鳥井流（鞠）……二九七
熱田神宮……一九〇
吾妻流（踊）……三一二
敦盛扇（能）……三一一
扇……七
扇合せ……三〇以下
扇賣り……三三〇
扇……二九七
扇の意樣……二九六・三〇二・三一〇―三一九・三二二・三二一
扇の記……一一
アフギの語原……二〇
扇の初現……四七
扇の生業……一二一

扇の贈答……一五一
扇の地紙……一〇七・二八〇・二九〇・三三〇
扇拜領……三一六
扇の骨……一〇六・一八七・二一九・二三三・二九一・三〇一・三〇五・三六・三一七
奏祭……（加茂祭を見よ）
海人藻芥……二八八
綾杉扇……一三四
淡繪……二三九
安德天皇……七二・一四二
アンリー二世（Henri II）……二二八

い

威儀命婦……一六七・一七〇
イギリスの製扇工業……二三二
伊勢貞丈……二九一
伊勢物語……一一六
伊勢流……二三六・二六八
イタリヤ……二一八・二二〇
一休宗純……一五四
一條門流……二七四
嚴島神社の檜扇……一三七—一四四
嚴島寶物圖會……一四一・一五〇
五ツ鈴……三一八
いつへかきれ（檜扇）……八一・八六・九四
和泉流（狂言）……三九
井上流（舞）……二二三
家の紋……一七六・二七七・二九八
今鏡……一四九
無紅（イロナシ）蔦扇（能）……三一五
色目……六七・九三
色目扇……三三一

う

打扇……二八五
宇治赤相觀翻……一五
鬱（ウチハ）扇……六・七・二五・二九
ウチハの語原……一九
鵜（ウトウ）扇（茶）……三〇八
善知鳥扇（能）……三一四
梅掛……三一六
梅茂都（ウノモト）（舞）……三三二
梅若流（能）……三一八
裏千家（茶）……三〇七
雲月扇（能）……三一五
雲龍扇（茶）……三〇七
永仁御即位用途記……二六三
繪師……二八二
エジプトの扇……二一七
江戸……三三〇
江戸時代の扇……二六八—三三・三八—三三一
繪所預……二四九・二七二
エトラスカの圓扇……二一七
塩袋抄……九
繪卷物……一四四
衣紋（エモン）家……一三五
燕巻（茶）……三〇九
國醫院扇合せ……三一以下
國醫天皇……三一

お（を）

扇（オウギ）……（扇を見よ）

歐洲の扇……二二平—二三七
小笠原流……二五六・二六八
阿國歌舞伎……三三一
忍壁皇子……一六・一七
織田信長……二六四
男　扇(能)……三一五
踊りの扇……三二〇—三二五
小野宮實頼……四三
鬼　扇(能)……三一四
大内義興……二二一
大　鏡……一〇四
大　將……二四六
大蔵流(狂言)……三一九
大地主神……二二
御裏砂子末廣……二七四
御産女房檜扇……八二
御手向扇……一九九
御　月　扇……二六九—二七三
御月扇領……二七〇
御前命婦……一六八・一七〇
御　召　扇……二九一
御湯殿上日記……二七三
表　千　家(茶)……三〇七
親　骨……五五・一八八
オランダ(和蘭)……二三一
薩涼軒日錄(オンリヨウケン)……二五二・二五九

か

匣　扇……二一〇
合歡扇……二二二
合竹扇……二六二
加賀扇……三三〇
河　海　抄……八八
鏡表骨扇……五三・八三・一三〇・一六三—一七一
懸　の　木……二九七
加冠遣扇……二七六
かさね檜扇……八七—九八
貴　摺　扇……二二四
春日御祭(ナン)……三一〇
春日行幸次第……二四二
春日驗記……一七五
春日祭の檜扇……七三
片　張　り……二二四・三三一
カタリナ(Catherina de Medici)……二二八
勝修羅扇(能)……三一一
葛　扇(能)……三二二—二四
金　澤……三二八
狩野松榮……二四九
狩野派……二四九・二七二
狩野元信……二四九・二五五
蝙　蝠　扇(かはほり)……三五・一八二・二七八・二八一・二八六・三〇七
蝙蝠扇の名の事……六〇—六五
カブリオレット形の扇……二三四
鎌倉時代の夏扇……一八二—一九五・二二六
鎌倉時代の檜扇……一六三—一八〇
鎌　足　彫……二七五・三〇一
神　扇(能)……三一〇
加茂齋院の檜扇……七八
加茂地下鞠の扇……二九九
加茂祭(葵祭)の扇……七〇・八二・一〇一・一〇三・一六五・一八九
亀山天皇……一九三
烏　扇……二二
烏　繪　扇……二四・二五五
喜例獻扇……二七三

變り彫……二八一
漢　畫……二五〇
官休巷（茶）……三〇七
看聞御記……二五四
官務家（壬生家）の檜扇……一三三・二四二―五

さ

菊慈童……三一四
北野天神縁起……一八九
喜多流（能）……三一七
吉菊扇（茶）……三〇七
吉祥扇（茶）……三〇八
吸江齋（茶）……三〇七・三〇八
給扇儀……四三・六九・二五五
教會の團扇……二一六
荘女扇（能）……三二三・三二四
教王護國寺の辛櫃……四三・三六
玉　藻……一四三・一五五
極地の扇……四
玉　業……五一
裁（キリカネ）金……三二
切透扇……一〇一
キリシヤの團扇……二一七
桐骨絵扇……二九八
綺麗扇……三三一
記錄扇（香）……三〇二
公達扇（能）……三一一
金　扇……一八四
金の日輪……一八四・二九二
銀表骨扇……八二・一〇二
銀　扇……一八四

く

公家の檜扇……七一―五・九六
鋼　物……二九七
九條禁實……一二二・一四九
九條門流……二七四
口　傳……九一・二六一
供奉女房……一六八
熊野の經塚……八四
九　曜……二九二・三一八
熊　柿……一〇四
黒　骨……三一六・三二九
花山天皇……六六
花鳥餘情……九
皇后宮の御檜扇……七八
皇太后宮の御檜扇……九
皇太子の御檜扇……七二
黄　帝……二九六
郭若虚……三〇八
観阿彌……三一六
観性法橋……一一二
観世卷水……三一八
観世流（能）……三一七・三三二
軍　扇……一八四・一九〇・二九〇・二九三・三二一・三三四

け

景阿彌……二五九
月舟壽桂……二四九
玄々齋（茶）……三〇七
源氏繪……二八六
源氏一香……三〇一

源氏物語……七九・一一六・二八六
源氏物語奥入……八九
賢聖御末廣……二七三
裘　帳……一六六・一七〇
建武式目……一九九
建暦の禁令……一八六

こ

格狭間縁……一九一・二七五
江州坂本村出土の扇
貢　性　之……三五三・三三〇
香染檜扇……二〇八
香　道……七三・七四
香　の　扇……三〇〇
孝明天皇……三〇〇―二
高麗扇……二九三
高麗圖經……二二
小形編蝙扇……二八七
小形鞠扇……二九八
久我通親……一四四・一四九
小加良須神社……二三・二五五
潮　月　扇……三三〇
後京極良經……一四九
古語拾遺……三二・二五六
五骨夏扇……九九・一二四・一四四
古　今　注……八・九
古今著聞集……一八八
後嵯峨天皇……一八七
後三條天皇……三六
故　實　家……二九二
後白河法皇……一二
巨勢金岡……二四・二五五

五節女房檜扇……七九・八四・一八七
後醍醐天皇……一七〇・二〇二・二〇六
故殿御記……二七九・二八〇
近衛家熙……二七九
近　衛　引……三一七
近衛門流……二七四・二八〇
木花咲耶姫尊……三二
好　扇(茶)……三〇五―九
小　檜　扇……一四二・一四三・一七五
後伏見天皇……一八五
氷碎き(の圖)……三一八
五　明(扇)……五・八―一三
五　曜……三一八
御用檜師……二四〇・二四九
金剛雲……三一八
金剛流(能)……三一七
婚儀の扇……三一九
今　日　巷(茶)……三〇七
金　春　流(能)……三一七

さ

彩畫扇……二一・二四八―五一
最秘抄……八九
歳末進扇(幕府)……二五二
堺……二五四・三二七
鷺　流(狂言)……三一九
櫻堂經塚の檜扇……一二七・一三一
さくらのみへかさね……八〇・九七・一七二
蚤(サグ)　糸……五一・一七三・一七四・二三七
笹　葉　形……二六一
爵……一九
差　骨……二五八

佐伯中將老扇……一二
申樂（サルガウ）……三〇九
山槐記……八六
三代實錄……四一
三條西實隆……二四三・三〇一
三條實萬……二四三
三百文扇子……二一〇
三本松……三一九
山門（延暦寺）……二八八

し

ジェームス二世（James II）……三二
詞花和歌集……一四五・一四八
茶（ジャ）寄（サイ）……三〇七
茂山流（能）……三一三
寺家の扇……二六〇―九
鄉子丸……三一九
賜扇……四三・二八五
紙扇の出自……五三―六
七夕……二九二
鶴岡女郎……一六五・一七〇
鄉折り……二六一・二八〇・三一七
仕手方のキマリ扇（能）……三一九
四天王寺藏扇面寫經……二二―二三・一二〇
篠塚流（能）……三二
本野宗傾（香）……三〇一
本野流（香）……三〇〇
志野流の扇……三〇〇―二
椎葉……二九八
榮明抄（水原榮明抄を見よ）
寺門（三井寺）……二八八
勝香扇……三三〇
しやく木のみなえりぼね……一八七
しやれ繪……二四〇・二五三・二五六
しやれ繪扇……二五四
蛍尤……二九六
拾遺集……二・四一
蹴鞠……二九六
蹴鞠の扇……二九六―九七
集古扇圖卷……三〇三
十骨（扇）……二五八・二八三・二九八・三〇五・三〇七
十骨扇許容……二九九
十骨鞠扇……二九七
十數骨……二五八
十炷香……三〇一
十八世紀の扇……三三一―三六
周文……二五二
珠光……三〇三
宿德の檜扇……五二・四四
壞尾……二五六
朱漆の地紙……二九七
飾扇扇（能）……三一二
順德天皇……一八六
尉扇扇（能）……三一二
祥雲扇（茶）……三〇八
成圓（樂）……一五五
將軍の扇……二九二
銷魂橋……三一三
諸侯の扇……二九一
徐渡……二一二
續日本紀……二八
如心齋（茶）……三〇七
如心齋好（茶）……三〇七
庶民の扇……三六一―三四

白菊扇(茶)……三〇七
白拍子……三一六・三二〇
白檜扇……七二・七三
白紡水扇……八二
新古今和歌集……四一
眞行草……二五六・三一七
神功皇后……一一

す

水原紫明抄……八八―九〇・一七二・一七三
水墨畫……二三〇・二五六
末廣(形)……二六〇・二七二・二八四・二八八―二九〇・三〇四・三一・三六・三八
末廣がり……二六〇・二八九
透扇……一〇一・一八八
杉扇……一〇二
杉目扇……一三一
蘇芳染……二九八
スペイン扇……二一九
スペインの製扇工業……二二
墨流し……一二〇・一三五

せ

世阿彌……三一五・三一六
西宮記……四三
清教徒……二二八
清少納言……九五・一〇六
清涼寺藏夏扇……一五〇・一五二―一七
潛礦類書……二〇九
仙源抄……八九
扇骨……三八・三九・三一七
扇骨の透彫……一九一・二二五・二三五・二七四―六
扇紙合……一〇八

撰集抄……二六
扇面寫經……(四天王寺扇面寫經を見よ)
千利休(茶)……三〇五
善隣國寶記……二一

そ

僧綱の扇……二三三
宋史……二八八
總スヽキ……六一
裝束抄……三八
宗堪……二四三
僧侶の扇……二六八・二六九
僧侶の檜扇……七三・二六八
即位の檜扇……七二
即中齋(茶)……三〇七―八
袖扇……二八七
外付(片張りを見よ)……二八五
空色に日出したる扇……一八四

た

大正・昭和時代の扇……三三三
陶淵明……三〇七
討朝鮮貿易……二一
大德(寺)……二八八
大日勢……二九二
大夫尉義經長申記……一八〇
太平記……一八二
對明貿易……二一〇
高岡流(狂言)……三一八
高尾山經塚の扇……一二二―五
高倉院御寄進扇……一四四
高倉天皇……八二・一四九―五〇

高倉流(家)……一七四・二三五
鷹司政通……三一九
鷹司門流……二七四・二八〇
瀧口聖……一七五
武内宿禰……一一
竹崎季長……一九〇
竹取物語……四二・五〇
多々良問答……二八九
橘嘉樹……一〇一
伊達正宗の扇……二六五
タナグラ土偶……二一七
棚守元貞……一三八
淡々齋(茶)……三〇八
短地の扇……三二四
丹頂扇(茶)……三〇八
丹波國分寺領……二七〇・二七一

ち

竹林七賢……二五〇・三一五
千鳥……三一八
茶の扇……三〇三―九
中啓……二八八・三一六
中平骨……二八〇
丁字流……二七四・二七五
長秋記……七九・八二・九五・一〇八
長保の禁令……七五

つ

付花……一七三・二三七
土御門内裏上棟式……二四二
圖引地紙……三三三
壺井義知……一〇一

つまくれない(妻紅)の扇……一九五・一九八・一九九・二七二
妻紅末廣(中啓)……二六六―八・三一三
貫之集……四一
徒然草……一七五・一七八

て

廷尉の扇……一八〇・二九〇・二九七
鐵扇……二九二
朝鮮扇……三二―四・三三〇
畜然……六一・二〇七
天皇の御檜扇……七二
殿上人の檜扇……七二・九四
殿中申次記……二七一
殿中扇……二六五・二八二・二九一
天智天皇……一一
天女扇(能)……三一二
天祿四年扇合せ……三一―六・一〇一

と

當世風の扇……二九一・三二・三六
東京帝室博物館……一一四
東寺塔供養……一八九
唐扇……二〇七・二〇九・二一四・二三二・二五八・二八八
桐油扇……三三〇
東籬扇(茶)……三〇七
圖畫見聞志……二〇八
土佐派……二四八・二七二
土佐光信……二六二・二七〇
土佐文書……二七〇
絨糸(檜扇の)……五一
融扇(能)……三一四
豐臣秀吉……二六四・二六五

豐丸……一二
鳥ノ子……一一〇—三三二

な

内侍……一六六・一七〇
中島宗夫記……一一二
長丁字……一七四・二三五
中骨……二一四・二六八・二八一・二八五
中浮（ナカウク）……二六二
中脇（ナカビラキ）……二六二
中骨……三五五・一八八
名古屋……三三〇
鄭須奥一……一三二・一八二
夏扇……六八・七〇・九八—一一〇・二一三・二一四・二三五・二六一・二七九・二八四・二八八・三〇二・三〇四・三三一
夏扇の繪……一〇七・二八二
夏扇の田自……一三五・八
ナポレオン一世（Napoleon I）……二二六
奈良扇……三三一
奈良朝の扇……二三五
奈良原經塚の檜扇……一二七—一三一
難波流の扇（繪）……二二九
南禪寺藏扇面貼交屏風……二四八—二五一・二六八・三三五
ナントの勅令……二二一
南洋の扇……四

に

煮魚……三〇一
西川流（繪）……三二二
二重丁字……二七五
二條門流……二七四
になむすび（蜷結）……一七四
二百文扇子……二一〇

女房檜扇……六六—八三・九三・九七・一七三・二五六—七・二四六

ぬ

布地扇……三三〇

ね

猫間扇……二四二・二七九・三一六
念佛扇……三二〇

の

能扇……三〇九—三一〇
野地（の扇面）……一一〇・一一四・一六〇・三三一

は

白扇骨……二九一・三一六
白扇……二三三・二九一
白條扇……三三一
幕末の扇……三三一
破軍扇……二九二
ばさら扇……一九八—二〇二
長谷川等伯……三〇六
八骨扇……二九八
八骨鶴中扇……二八三—三三
八條女院……一一三
花（ハナ）鳥（イクサ）扇（繪）……三一五
花柳流（繪）……三二二
八幡……二〇九
蝙蝠子方の扇（繪）……二一五
速玉神社の檜扇……二三八—二四〇
蓮扇……三二一

パリの製扇工業……二一九
阪東流(踊)……三二

ひ

緋扇……三三・三五・三八
檜扇……四八—五二・六一—三・七二—九八・一六三—一八〇・二〇七・二三三—四七・二八八・二九八
檜扇の絵……七五—八・八一・八二・一三五・一三八—四二・二三八—二四〇・二四六
檜扇の表骨……一六三・一七一・一七二
檜扇のかさね……八六—九八・一七九
檜扇の要……二三六
檜扇の出自……四九—五三
檜扇の作行き……二四二
檜扇の絨方……二三六
檜扇の絨尻(トジリ)……二三六
檜扇編序の口傳……九一・九二
東山時代……三〇二
常陸風土記……七一
一重扇……八七
檜・骨……一八八
兵範記……八四
百錬抄……一五一
平骨……三八・一〇一・一八八・三三八
便面……五
檜柳扇……二九

ふ

布衣記……一七三
武官の扇……二九〇
武家の扇……一八三—五・一九〇・二八九—九二
福王流(能)……三一八
藤原定家……八三・八九
藤原忠親……一〇一
藤原爲業……一〇四
藤原信實……一八九
藤原宣胤……九六
藤原道兼……六六
藤原道長……六六
藤原師長……一〇一
藤原頼通……七三
藤間流(踊)……三二
不審庵(茶)……三〇七
夫木集……四一
文月暈扇……二八五
文月雪洞扇……二八五
冬扇(檜扇を見よ)……六八・七一・一五一・二二二・二六一
フランスの扇……二一九・二二二—六
フランス革命……二三五
ブリーゼ式扇……二二〇・二二四
文室眞人淨三……二九

へ

平安朝の扇……三〇—一五二・三二六
平家……一三七・一五一・三二一
平家物語……一五一・一八二

ほ

ボーデ(Baude, Alphonse)……二二六
貿易扇……二〇八・二一〇・二二一・三三三
寶生流(能)……三一七
法隆寺……一一四
蒲葵扇……七
北山抄……六九
細面檜扇……八三—五・一四二
細骨……三九・四四・九九・一二二・一二三・三二八

牝丹花肯柏……三〇三
沒骨描……二四〇
ポルトガル……二一八
凡僧の扇……二八八
雪洞（ボンボリ）扇……二六二・二八四―八・二八九

ま

蒔絵扇……三三一
枕草子……八六・一〇九・一七五
負修羅扇（能）……三二一
増鏡……一八七・二九八
松の下の能……三一〇
マリア・テレサ……二三二
鞠扇……二九六―一九九
マルチンの扇……二一〇・二二四
マンダリン扇……二二六
萬葉集……一六

み

御子左……二九九
御田祭の扇……二三
龍扇（能）……三一四
水（入）扇……七八・一六五・一六八・一六九
三ッ雲……三一八
御歳神……二二
皆彫骨扇（ミナエリボネ）……一八七―一九二・一九九・二一〇・二二三・二二四・二三四・二七五・二九二
みなくれない（扇）……一八二・一八五・一八八・二九二
みなむすび……一七四
源順……六
源光行……八八
源義經……一八〇・二九〇
壬生家の檜扇……（官務家の檜扇を見よ）
壬生忠岑……四一
三重かさねの檜扇……八〇・八一・九三―五・一二七
都良香……六・二九・一八九
妙心（寺）……二八八
明成祖……二〇九

む

向丁字彫……二七四・二七五・二九九
村上天皇……四一
紫式部……七九・一〇五
室町時代の扇……二三一―二六四・三一六・三二六・三二七
室町時代の扇絵……二三九・二四〇・二四八―五六
室町時代の貿易扇……二一〇・二一一

め

明皇・貴妃……二五〇・三一二
明月記……八三
目近（メチカ）扇……三三一
メヂチ家（Medici）……二一八

も

孟夏旬……六九
蒙古襲來絵詞……一九〇
孟冬旬……七〇
木版刷……一一七・三三一
裏扇……二三五・三二九
物語絵……一一六
桃井直詮……二六二
桃山時代の扇……二四七・二六四
桃山時代の扇面畫……二四八―二五〇
門流の末裔……二七四・二七六
門流の夏扇……二八二

葉扇……一三
葉黄記……一六五
横目扇……七二・九五・一三二―五・二三六・二四七
吉野朝廷時代の扇……二〇一―三
四辻善成……八八・一七二
四ッ目丁字……二八〇

ら

羅張扇……三二・三七―四〇・一〇〇

り

利休形(茶)……三〇五
流(リウ)の紋……三八・三二一

る

ルイ式の扇……二三五

や

八重ひとへ……三三一
山岡俊明……八五
山口……三二八
山科流(家)……一七四・二三五
大和絵……二五〇・二五六・二七二
山伏扇(能)……三一四

ゆ

有職故實……二三五・二六八―二九三
友禪扇……三三一
愈好齋(茶)……三〇七・三〇八

よ

洋紙の地紙……三三三

ルイ十四世(Louis XIV)……二二〇―二三三
ルイ十五世(Louis XV)……二二〇―二三五・二三五
ルイ十六世(Louis XVI)……二三五
類聚名物考……八五・八八

ろ

ローネエット扇……二二六
羅馬の闘扇……二一七
ロール地紙……三三三
老女扇(能)……三一三
六條院大遊……三三六
鹿苑日録……二五一
六骨透……二七六・二九七
六骨扇……二九〇

わ

王朝の扇……(平安朝の扇を見よ)
若柳流(踊)……三二
脇方の扇(能)……三一八・三一九
脇能……三一二
倭扇……二〇八・二一〇
ワット(Wattau)……二二〇
和名類聚抄……六・四五
童扇(能)……三一四

後記

もう數年も以前の事である。

寒い冬の一夜、鳴瀧の原先生の御宅で四方山の話に夜のふけるのを知らなかつた西堀一三氏と同座した私は先生から扇の話をまとめて見る事を慫慂された。曾て、私がまだ考古學專攻の一學生として初めて今はなき濱田先生の教室の扉をくゞつた時、先生から「扇の研究で學位をとりたまへ」と茶話の中に薦められた事をその時ふと思ひだした。——まとまつた考へもなかつたけれど私は一つ書いて見ようかといふ氣になつた。かう思はせたのには又生前父が扇の技を何か書いておけばよいになアと云つた事もあつたので一つには父へのさゝやかな手向の心からでもあつた。——皇紀二千六百年の盛大な祝祭のあつたあの日、初めて筆をとつてからもう一兩年もたつてゐる。學校を出てしまふと何かと扇折りのなりはひに追立てられてこれとてまとまつた時間も持たず昨日は二枚今日は一枚とかき繼いで春に春を迎へてとうとう今年の春も暮れやうとする四月の三十日ともかくも筆を擱く事が出來た。

あとをふりかへると書かねばならぬ事で書き落した事も隨分と多い。又自分の家の口傳などは、多く扇の製作に關する事であり、人々の興味の外であると思つて書かずにしまつた事もある。扇の製作の過程なども書く豫定であつたが紙數の關係でやめてしまつた。何分にも三百頁餘の小册子である。各の時代の扇はそれで一册の書物は出來る。能の扇にしても茶の扇にしても、有職故實の扇にしても充分一册

にはなり得る。だから、それらをこの一册の中に充分に書きつくす事は無理である。けれども、その大綱だけは記して置いたつもりでゐる。不足、誤記の多い事であらう。博雅の士の御叱正をお願ひしたい。

書いてゐる中に、かう思つた。——讀みづらい資料の羅列はけわしい山登りの樣な氣がするものである。資料と行文との行列は、まるであるきにくい石の小徑と鋪道との錯雜した道路を行く樣でいやなものであると。私は、なるべく小路でもよい坦々とした道が行きたかつた。讀者とてもさうであらう。

私は、できるだけ資料を省いた。研究する人は自分で資料をあさればよいではないか。私達は一とほりの知識を扇にもてばよいのだ。特にこの小册子はそれを目的としてゐる。研究の報告書ではない。徒然に見てたのしみたい爲に事情のゆるすかぎり多くの圖を入れたかつた。たゞ小册子である爲に存分の事が出來なかつたのがうらみである。圖版に入れる寫眞に力をあたへられた方々、——京大では源豐宗氏、東京博物館では後藤守一氏、石田茂作氏や神林淳雄氏、嚴島神社の小川小平治氏などの方々の御厚情に充分むくいられなかつた事が殘念である。

いふまでもなく、この本のなるに際して受けた新村出先生、原隨園先生、梅原末治先生や西堀一三氏等方々の御厚情と御輟捷、それに書肆の河原武四郎氏が隨分と組や製版に無理を云つた事を快くきゝ入れられた厚意などに對して感謝の念の切なるものがある。失禮ではあるけれど、本のこの最終の頁に最大の謝意を書き續ける次第である。

昭和十七年八月十五日印刷
昭和十七年八月廿日發行
〔三・〇〇〇部〕 日本の扇
定價 貳圓八拾錢 日本の美と數藝 1

著者 京都市河原町蛸藥師下ル 中村清兄
發行者 京都市柳馬場三條下ル 河原武四郎
印刷者 (西京三) 株式會社似玉堂 福井松之助

發行所 京都市中京區河原町蛸藥師下 河原書店
會員番號一〇六〇一八
電話本局②六八四七番
振替京都二一五八番 大阪五四三八八番

配給元 東京市神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

—日本の美と教養—

既刊

西堀一三著 掛物と日本生活 定價 貳圓二〇 〒

鈴木宗康著 諸國名物菓子 定價 貳圓二〇 〒

壽岳文章著 和紙風土記 定價 貳圓二〇 〒

林春隆著 日本の酒 定價 貳圓二〇 〒

近刊

高瀨重雄著 日本人の自然觀

奥村伊九良著 大和魂

日本出版文化協會推薦圖書

西川一草亭著 日本の生花 定價 貳圓二〇錢 〒

河原書店發行

777
44

年 月 日

原書缺